

第5学年 国語科学習指導案

指導者 木村 雅子
真家 裕子

- 1 単元名 「本の帯」をつくって、お気に入りの宮沢賢治作品を推薦しよう
教材名「注文の多い料理店」（東京書籍5年下）

2 単元を貫く言語活動とその特徴

本単元を貫く言語活動として、「自分が選んだ物語を『本の帯』にして推薦する」ことを位置付けた。「本の帯」とは、本を販売する際にその本の魅力や読み取ったところを記載して本の表紙に巻き付けた宣伝媒体である。ここで取り上げる「本の帯」は、読んだ作品を友達に推薦する目的で作成するものである。帯には、自分で選んだ本を推薦する「あらすじ」「お気に入りの部分」「作者紹介」「登場人物」「キャッチコピー」「感想」の中からいくつかを位置付ける。限られたスペースの中で推薦するために、凝縮された自分の思いを示すことになる。

また、「本の帯」の各項目を書くに当たっては、優れた叙述について考えたことや読んで考えたことを交流し合うことにより、作品に表現される情景や心情を、言葉のもつイメージの広がりから豊かに想像し味わわせ、自分の考えを広げたり深めたりする学習を展開していく。さらに、友達の意見と比べたり、参考になるところは取り入れたりするといった点を意識させながら話し合わせる。こうした手立てにより、本単元で育成を目指す「C読むこと エ、オ」の能力を身に付けさせることができると考えた。

3 単元について

(1) 児童観

本学級の児童は、朝の読書活動やすきま時間の読書活動に進んで取り組んでいる。読み聞かせも好きで、熱心に耳を傾ける姿が見られる。読書量も増えてきているが、読書をして感じたことや考えたことを友達と語り合ったり、お薦めの本を紹介し合ったりする様子はあまり見られない。児童はこれまでに、「だいじょうぶだいじょうぶ」の学習で、登場人物の心情を考えたり「世界でいちばんやかましい音」で、物語の構成を捉え、中心人物の変化について考えたりする学習をしてきた。しかし、簡潔なあらすじにまとめたり、登場人物の心情に沿って場面を想像し、自分の言葉で説明したりする力は十分とは言えず、その発表や発言には消極的になる児童が多い。文章を読んで積極的に自分の考えをもつことや、友達の考えと自分の考えを比べてさらに深く考えて読み合うことが課題である。そこで、物語を語り合うことで、より一層自分の考えを広げたり深めたりすることができるようになってほしいと考える。

(2) 教材観

宮沢賢治の作品は、優れた叙述や登場人物の心情、様々な作品との比較、作品から強く伝わってくるメッセージを明らかにして読むことに適していると考える。この物語は、「設定」と「結末」を同じ「現実の世界」として描き、その間に「不思議な世界」での出来事を挟み込むことで、悪夢のような不気味さを際立たせている。中心人物である2人の紳士は、自分の犬の命をお金の価値でしか捉えない。そして、「戸」の言葉を都合のいいように勝手に解釈して罠にかかるつていき、自分たちの身に付けている「文明」を剥ぎ取っていく。この物語は、会話文から人物の性格や心情の変化をつかみやすく、人間が自然に仕返しされるという展開が、児童にとって理解しやすい。生き物の命を何とも思わず、便利さだけを追求する都会生活者への反感と現代文明社会に対する痛烈な批判がファンタジー仕立てで語られている。風刺とユーモアにあふれる宮沢賢治の文学作品の魅力に触ることで、児童の読書の幅を広げることができると考えられる。さらに、並行読書で宮沢賢治の他の作品も取り上げることで、想像を豊かにしながら読む力を高めることができるとともに、語感や言葉の使い方に対する感覚も養うことができると考えられる。

(3) 指導観

指導に当たって、児童の関心を継続させながら作者への思いと結びつけていくために、単元のめあてを確認するとともに、学習の見通しをもたせるための活動を行う。読み取りの後に、作品のおもしろさを「本の帯」にして紹介すること、そのために作品の表現の工夫やおもしろさを捉えることを押さえる。そこで、教師が作成した「本の帯」を見せたり、図書館にある「本の帯」を見せたりする。また、宮沢賢治の作品に対する理解を深めるために、宮沢賢治をテーマにしたブックトークを教師が行う。並行読書への意欲を高めるとともに、多くの作品を読んで宮沢賢治の考え方やものの見方、表現のおもしろさについて紹介し合うことを知らせておく。次に、「物語の構成や表現の工夫について考えよう」という視点に立った読み取りと、作者が読者に伝えるための表現の工夫やおもしろさに気付かせる学習構成で展開する。第2次では、読み取りとともに「注文の多い料理店」の「本の帯」を作成し、第3次では、

自分の選んだ宮沢賢治の他の作品について「本の帶」を作成していく。「注文の多い料理店」と共通するところ、異なるところを見つけたり、その作品を通して作者が伝えたかったことを考えたりする活動を通して、単元の目標を達成できると考える。

4 単元の目標

- 物語に興味をもち、構成や表現の工夫、登場人物の心情の変化に目を向け、物語のおもしろさを読み取ろうとする。
(国語への関心・意欲・態度)
- 物語の構成や文章表現の工夫、登場人物のものの考え方や心情の変化を読み取ることができる。
(読むこと)
- 物語を読んで考えたことを話し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
(読むこと)
- 見る人に「読んでみたい」と思わせるような表現の工夫や書き方に気付くことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

5 単元の評価基準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・物語に興味をもって、おもしろさの工夫を探しながら読み、それを意欲的に「本の帶」に表現しようとしている。	・「本の帶」で推薦するために構成や文章表現の工夫などから、物語のおもしろさを読み取っている。 ・文章を読んで考えたことを話し合い、作品の魅力について自分の考えを広げたり深めたりしている。	・語感、言葉の使い方に対する感覚などについて意識して文章を読んでいる。

6 単元の指導計画（10時間扱い）

主な学習活動	主な評価
1 教師による宮沢賢治のブックトークや「本の帶」の紹介を見て、今後の学習への見通しをもつ。	・「本の帶」での本の推薦に関心をもち、作品を読もうとしている。 (関心・意欲・態度)
2 「本の帶」で推薦することに向けて「注文の多い料理店」を読み、あらすじと物語の構成を捉える。	・物語に興味をもって、おもしろさの工夫を探しながら読もうとしている。 (関心・意欲・態度)
3 「注文の多い料理店」を読み、物語のあらすじをまとめて、「本の帶」の下書きをする。	・出来事を押さえ、物語の構成を捉えている。 (読む能力)
4, 5, 6, 「本の帶」で推薦することに向けて「注文の多い料理店」の内容を読み取り、キャッチコピーや、お気に入りの文を考え、「本の帶」の下書きをする。(本時は第5時)	・2人の紳士の心情を読み取り、そのおもしろしさを捉えている。 (読む能力) ・2人の紳士の変化したところと変化しなかったところを読み取っている。(読む能力) ・構成や文章表現の工夫などから、物語の魅力を読み取っている。 (読む能力) ・言葉の使い方や語感の違いに意識をもって読んでいる。 (言語についての知識・理解・技能)
7 「本の帶」を清書する。	・物語の魅力が伝わるように、工夫しながら書こうとしている。 (関心・意欲・態度)
8, 9 並行読書していた宮沢賢治作品の中から作品を一つ選び、「本の帶」の各項目の下書きをつくりながら読む。	・友達の意見を聞き、自分の意見と照らし合わせてより深めようとしている。 (関心・意欲・態度)

10 完成した「本の帯」を交換し、感想を交流する。家の人にも感想を書いてもらう。	・さらに物語を読みたいという思いを膨らませている。 (関心・意欲・態度)
--	---

7 本時の学習

(1) 目標

場面や登場人物の心情の描写を手がかりに、物語のおもしろさを伝える「キャッチコピー」を書くことができる。

(2) 準備・資料

ワークシート、「本の帯下書き」

(3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
1 本時のめあてを確かめ、学習の見通しをもつ。 物語のおもしろさを伝える「キャッチコピー」を書こう。 ・キャッチコピーについて確認する。 ・実物を見る。	・前時までに学習した内容を振り返り、物語のおもしろさについて確認できるようにする。また、2人の紳士の心情や、変化したところとしなかったところについて確認できるようにする。 ・「キャッチコピー」についての具体的な例を挙げ、読み手を引きつけるような観点が盛り込まれていること、書き方（言葉遣い・表現技法）を工夫していることが理解できるようにする。
2 キャッチコピーを考える。 ・物語のおもしろさを200字にまとめた文章を、20字程度のキャッチコピーにする。	・「おもしろさ」という観点だけでなく、「魅力」という言葉に置き換えて考えてもよいことを確認する。
3 自分の考えたキャッチコピーについて、友達と交流する。 (1) なぜそのキャッチコピーにしたのか、理由を明確にして説明する。 (2) 友達のキャッチコピーについて、「物語のおもしろさを伝えているか」「読み手が本を読みたくなるような書き方か」という観点で話し合う。 予想されるキャッチコピー 「二人の入った料理店の隠された秘密が明らかに！」 「都合良く解釈していた料理店からの注文、本当は全部ちがう意味で…」 「山奥で見つけた店の秘密が今明らかに」 「料理店からの謎の注文、二人はどうなる」 「入っても入っても戸がある料理店とは…」	・早い段階で下書きができた児童には、言葉遣いに誤りがないかなどよく見直させるとともに、よりおもしろさが伝わるような言葉や表現を考えられるようになる。 ・20字程度のキャッチコピーを考えるまでの時間を十分に確保するが、最後までできていなくても、書けた段階で友達にアドバイスをもらえるようにする。 ・友達に自分の考えをきちんと説明できるように、グループで意見交換する段階を設けるようにする。キャッチコピーが完成していない場合は、文章にまとめたものの中からみんなと一緒に考えられるようにする。 ・観点は黒板に明示しておき、それぞれのキャッチコピーのよさについて、観点に沿って具体的なアドバイスができるようにする。 ・最初に提示したキャッチコピーを参考に、よりよい表現に練り上げていけるようにしたい。
(3) 自分のキャッチコピーを見直して、下書きに書く。	〈評価〉 場面や登場人物の心情の描写を手がかりに物語のおもしろさを伝える「キャッチコピー」を書いている。 (観察・ワークシート)
4 本時の学習を振り返り、次時の学習内容について確認する。	・次時は、「お気に入りの一文」を決めて話し合うことを確認する。